【600】

氏　　名	池田寛子（いけだ ひろこ）
学位(専攻分野)	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博第278号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	W. B. Yeats : Irish Folklore and Nationalism （W. B. イェイツ—アイリッシュ・フォークロアとナショナリズム）
論文調査委員	（主査）教授 鈴木雅之　教授 丸橋良雄　助教授 水野眞理　助教授 桂山康司

論文内容の要旨

本学位申請論文は，アイルランド生まれの詩人・劇作家・神秘主義者ウィリアム・バトラー・イェイツ（William Butler Yeats 1865-1939）を研究対象にしたものである。本論文で申請者は，イェイツが，終生アイルランドの政治的かつ文化的独立に深い関心を抱き続けたナショナリストであり，アイリッシュ・フォークロアを尽きせぬ源としてそこから詩作の霊感を得ていたと論じる。本論文は「アイリッシュ・フォークロアとナショナリズム」という観点から，イェイツの第一詩集『オシーンの放浪』（1889）から最晩年の「クレージー・ジェーン詩群」（1929-31）にいたるまで，それぞれの時期の代表作を取り上げ，これまでフォークロアの影響が指摘されなかった作品にも一貫してその形跡を読みとることができることを論証したものである。本論文は「まえがき」と「序論」および全5章で構成されている。

「まえがき」と「序論」では，フォークロアがアイルランドの独立運動においてもつ特別な意味について詳細な解説を施し，5章からなる本文への導入の役割を果たしている。申請者によれば，アイリッシュ・フォークロアの特徴は次の三点である。(1)アイリッシュ・フォークロアはその口承性に特徴がある。(2)フォークロアはアイルランド語復興と強く結びついていた。(3)フォークロアは農民的文化の復権にもつながった。イェイツにとり，フォークロアはアイルランドの文化的アイデンティティの基盤という政治的意味合いを強く帯びていた。アイリッシュ・フォークロアとナショナリスト・イェイツの結びつきは必然的なものであった，と申請者は指摘している。

第1章では，オシーン伝説を下敷きにした劇詩『オシーンの放浪』を取り上げ，文化的ナショナリズムの可能性に夢を託すイェイツについて論述している。この時期のイェイツはカトリック主導のナショナリズム運動から疎外されていく危険を察知し，国内の利害対立，宗教的・社会的断絶が独立運動の弊害となりつつあることを危惧していた。対立解消の手がかりを模索するイェイツの軌跡を『オシーンの放浪』に綿密に辿っている。

第2章では，詩集『葦間の風』（1899）を取り上げる。『葦間の風』はケルト神話の原型のひとつ太陽神話説を下敷きにした作品である。この作品は，イェイツがアイルランド文芸劇場を立ち上げ，文化的ナショナリズムの力に大きな期待を抱き，アイルランドの生きた伝統に根ざした文学を創造しようと試みた結果であった，と申請者は述べている。

第3章では，世紀のかわり目1900年に出版された劇詩『影なる海』を取り上げる。この時期のイェイツは，文化的ナショナリズムと緊密な関係を保ちながらも，それが急進的・排他的ナショナリズム運動に接近していくことに対して疑いと不安を募らせていった。イェイツが抱いた不安や疑いは，『影なる海』の1900年版から1906年版への改稿過程に如実に現れている。イェイツのフォークロアへの言及が1904年以降途絶えてしまったことから，多くのイェイツ学者は，イェイツがフォークロアへの関心失ってしまったと解釈する。しかしながら申請者は，イェイツがフォークロアへの関心を失ったのではなく，むしろフォークロアに対して距離を取ろうとしたその距離にナショナリズム意識が大きく関与しているのだと主張する。

第4章では『役者女王』を取り上げる。この作品におけるフォークロアの取り扱いには，ナショナリズム意識のあり方を問い直そうとするイェイツの眼差しが反映されている。『役者女王』は1907年に着想され，復活祭蜂起（1916）から自由国

成立（1922）にかけての混乱を極めるアイルランドで，イェイツが試行錯誤しつつ書き続けた作品である。この時期のイェイツは，ナショナリズム運動に対して距離を置き，暴力的で過激な独立への動きに対して曖昧な態度を取り続けていた。イェイツが『役者女王』の中で行ったことは，王の交代や時代の変わり目に神秘的動物が現れてすべてを破壊するというフォークロアのモチーフを利用しながら，革命に沸くアイルランドに民衆の夢が実現することに疑問を投げかけ，むしろタブーともいえる社会諷刺を盛り込むことであった，と申請者は論じている。

第５章では「クレージー・ジェーン詩群」８篇を扱う。1922年のアイルランド自由国成立，それに伴う北アイルランドの成立から10年近くも経過した1930年前後の作品である。この詩群の背景には，古代から現代まで多種多様な形で語られてきたアイルランドを象徴する女性をめぐる物語がある。アイルランドを象徴する女性が，外国人を追放し国家のために命を捧げる英雄を求めるという物語は，アイルランドの独立に大きな影響を与えてきた。「クレージー・ジェーン詩群」には，過去の憎しみを乗り越え，他者を受け入れようとする視点をさぐるイェイツの姿が浮き彫りにされている。

申請者は，アイルランドの文化遺産，生きた共有財産，アイルランドの文化的アイデンティティの象徴としてのアイリッシュ・フォークロアへのイェイツの熱意は，生涯一貫して変わることなく続いていたと結論づけている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本学位申請論文は，アイルランドの詩人ウィリアム・バトラー・イェイツ（William Butler Yeats 1865-1939）の作品を，その初期から晩年にいたるまで，アイリッシュ・フォークロアとナショナリズムの観点から考察し，イェイツのアイリッシュ・フォークロアへの関心は終生途絶えることなく続いていたことを論証した労作である。

詩人，劇作家，神秘主義者などさまざまな顔をもつイェイツの研究は，欧米のみならずわが国においてもきわめて盛んであるが，その多くが詩人としてのイェイツ，劇作家としてのイェイツ，あるいは神秘思想家としてのイェイツを対象とする。しかしながら，広い意味でのアイリッシュ・フォークロアとの関連からイェイツの生涯と作品を一貫して論じた研究はかならずしも多くはない。「まえがき」と「序文」のなかで申請者は，イェイツの時代には，フォークロアは単なる好古学的（antiquarian）関心にとどまらず，アイルランドのアイデンティティを支える民衆文化として国家の基盤形成をうながす優れて政治性を帯びたものとなり，ナショナリズム運動の思想的支えとなっていたことを十分な説得力をもって論じている。「まえがき」と「序文」は本論文の基盤をなし，本文への適切な導入の役割をも果たしている。

申請者は手堅く論をすすめ，イェイツ作品の霊感源となったアイリッシュ・フォークロアを探り，それがイェイツというフィルターを通過する際に生じた変容の模様，加筆修正の跡を緻密なテクスト分析によって解明し，さらに執筆時のアイルランドの政治的状況やナショナリズム運動とイェイツとの関連を明らかにする。

本論文の優れた点は以下の三点である。①イェイツのアイリッシュ・フォークロアへの関心とナショナリストとしての活動を個別に扱うことをせず，双方が交差する領域を研究対象としている。②イェイツのアイリッシュ・フォークロアへの関心は1904年頃に終わったとするこれまでの学界の通説を覆し，晩年にいたるまでその関心は続いていたことを論証した。③アイルランド語文献（フォークロア，詩集など）を含む一次資料を渉猟し，豊富な資料を綿密に解析・検証した上で堅固な論を構築している。

これまでのイェイツとフォークロアの研究は，バラッドを除けば，もっぱら彼の初期作品に集中していた。ロバート・ウェルチ（1980）によれば，イェイツは1888年から1904年にかけて64篇のエッセイを残したものの，以降1920年までの16年間はフォークロアをテーマにしたエッセイをほとんど書いていない。イェイツのアイリッシュ・フォークロアへの関心が，1904年以前に集中していることは一目瞭然である。しかしながら申請者によれば，アイリッシュ・フォークロアについての言及が見られなくなった1904年以降も，イェイツの関心は続いていたのであり，そのことを申請者は，イェイツが利用したと思われるアイルランド語と英語の対訳になるフォークロアの精緻なテクスト分析等を通して，イェイツへのアイルランド語的発想の影響を探りつつ，具体的作品に即して実証している。第３章『影なる海』（1900-1906）と第４章の『役者女王』（1907-1919）にも，フォークロアの痕跡があることを豊富な資料を基に分析している。

イェイツの心に常に懸かっていたのは，アイルランドのナショナリズム運動である。アイリッシュ・フォークロアへのイェイツの関心はこのナショナリズム運動と切り離して考えることはできない，と申請者は主張する。申請者は，第１章と第

２章では，イェイツが文化的ナショナリズムに深く関わっていた時期，第３章では文化的ナショナリズムへの疑いを抱き始めた時期，第４章と第５章では，イェイツがナショナリストであるというよりはむしろ保守的な傾向を強めていった時期を取り上げ，それぞれの時期を代表する作品を論じ，アイルランドの文化遺産，アイルランドの文化的アイデンティティの象徴としてのアイリッシュ・フォークロアへのイェイツの熱意が生涯冷めることはなかったことを検証している。こうして，本論文では，イェイツとナショナリズムとアイリッシュ・フォークロア三者の関係が，初期から晩年にいたるまでその連続性と変容が鮮やかに辿られている。

以上のように，本論文は先行研究を十分に踏まえたうえで，1880年代から1930年代に至るアイルランドの複雑な政治的状況をからませながら，初期作品から晩年に至るまでアイリッシュ・フォークロアへのイェイツの関心は一貫してあったことを説得的に論じた，大変意義のある研究である。

本論文は，文化・社会環境の総合的・学際的研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻ヨーロッパ文化・環境論講座の理念に相応しい内容を備えたものだと判断できる。なお，本論文を構成する全５章のうち４章までは，すでに関連の学会誌などに公表されている。

よって，本論文は，博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年１月20日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。